

## 第30期 上級日本語特別コース（2010年10月～2011年9月）

糊 山 洋 介

第30期上級日本語特別コースは、「上級レベルの日本語能力の習得（話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の3つを目標として行われた。

学習者は、7カ国、9名（ウズベキスタン：2名、韓国：2名、カンボジア：1名、スウェーデン：1名、スペイン：1名、中国：1名、ハンガリー：1名）であった。なお、大震災のために名古屋に避難していた筑波大学の日研究生が、5月から7月の間、コースに参加した。また、10名の教員が指導に当たった。

以下、主要なプログラムおよびアンケートの結果などについて概説する。

### (1) 教科書による日本語学習（10月～4月）

『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』『現代日本語コース中級Ⅰ 聴解ワークシート』『現代日本語コース中級Ⅱ 聴解ワークシート』（いずれも名古屋大学日本語教育研究グループ編、名古屋大学出版会）を教科書として日本語学習を行った。補助教材として、「プリテスト（予習のチェック）」「プリテスト：補足（連語など）」「復習クイズ」「文法補足説明」を使用した。また、3課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては、録音に基づき個別指導も行った。

### (2) 応用会話（10月～4月）

教科書の会話が大学などの限られた場におけるものであることから、社会における様々な場における会話力（表現力、運用能力）を高めることを狙いとして、「応用会話」を行った。教材として、各種のモデル会話などを作成し、使用した。

### (3) 入門講義・特殊講義（10月～7月）

日本に関する基礎知識を身に付けること、レポートのための基礎知識および基本的な研究方法を習得する

ことを狙いとして、10月～2月（前期）および4月～7月（後期）の期間、それぞれ4つの分野の入門講義を14回（各90分）行った。前期は、「日本文化論Ⅰ」「国際関係論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」であり、後期は、「日本文化論Ⅱ」「国際関係論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」であった。学生は、前期は4科目のうち2科目以上を選択、後期は4科目のうち1科目以上を選択することとした。なお、入門講義は全学留学生が受講できるものであり、大学院研究生、短期交換留学生などとともに受講した。

また、特殊講義（必修）として「音声学」（90分×7回）を行った。

### (4) 作文（レポートのための基礎訓練）（1月～4月）

レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして、「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文・レポートに役立ついろいろな表現」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」「論文で使われる言葉」などについて学習した。

### (5) 発展読解（10月～4月）

発展読解として、「精読」（教科書の読解教材に代わるもの）、「新聞読解」、「問題付き読解」（生教材に読解の手助けとなる問題を付したもの）、「本の読解」（エッセイ・小説など、教員が用意したものの中から、学習者が興味のあるものを選択）などを行った。

### (6) スピーチ（10月～7月）

自国の紹介、自分がふだん考えていることをはじめとする様々なトピックについて、学生がスピーチを行った（1人、1回、10分程度、スピーチ後に質疑応答）。

### (7) レポート（1月～7月）

学生各自がテーマを決め、教員の個別指導のもとで

レポートを作成した。分量はA4、20～35枚程度である。なお、今期も、「論文」「調査報告」「随筆」「創作」という4つのカテゴリの中から、学生が1つを選んで取り組むこととしたが、最終的に、8名が「論文」、1名が「随筆（紀行文）」を執筆した。研究成果は『2010～2011年度日本語・日本文化研修生 レポート集』（298ページ）として発行した。また、中間発表会（5月、発表：20分／質疑応答：10分）、最終発表会（7月、発表：25分／質疑応答：5分）を実施した。レポートの題目は以下の通りである。

#### (1) 論文

1. 袁夢茹(中国)「日本の駅のバリアフリーー名古屋市営地下鉄の駅を事例にー」
  2. クチコロフ・ミルシヨド (ウズベキスタン)「ホームレスの高齢化問題とその対策ー愛知県のケースを中心にー」
  3. サバテビスカラ・モンセラト (スペイン)「日本語の死の婉曲表現」
  4. チャンスヨン(韓国)「明治時代の女性の生き方ー樋口一葉の作品に現れた女性像からー」
  5. ノーン・ソレイメアス (カンボジア)「日本の国民年金制度の問題ー少子高齢化と未納問題を中心にー」
  6. フサイノヴァ・ウミダ (ウズベキスタン)「日本の司法制度：理念と現実ー民事司法制度を中心にー」
  7. ファゼカシュ・オルショヤ (ハンガリー)「日本の祭りの変化ー本来の祭り・祭礼・現在の祭りー」
  8. ベルグルンド・ヘンリック (スウェーデン)「ニコニコ動画の機能ー現状と今後の発展の方向ー」
- (2) 随筆（紀行文）
9. キム・ヒョンジュ (韓国)「天下人への野望ー織田信長の縁の地をめぐるー」

#### (8) 総合演習（5月～7月）

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして、総合演習を行った。教材は新聞・雑誌の記事やテレビ番組などを使用し、学生は多様な言語活動を行った。テーマは「なごやとやきもの：リトルプレス、ジンを通して東海地方の特産物を知ろう」「ことばで伝える、ことばで遊ぶ」「日本人とスポーツ：心技体の世界」の3つである。各テーマの実施期間は1～2週間

である。

なお、「なごやとやきもの：リトルプレス、ジンを通して東海地方の特産物を知ろう」では、3つのグループに分かれて、調査・インタビュー等を行い、リトルプレス／ジンを作成した。リトルプレス／ジンは、『2010～2011年度日本語・日本文化研修生 レポート集』に掲載した。調査担当者、調査地、リトルプレス／ジンのタイトルは以下の通りである。

#### (1) エン、キム、メアス、ウミダ

多治見（美濃焼）「一緒に Experience しよう～多治見の美濃焼～」

#### (2) オルシ、チョウ、モンセ

常滑（常滑焼）「どこ？ とこなめ！」

#### (3) ヘンリック、ボブ、ミルシヨド

四日市（萬古焼）「ユウヤク」

#### (9) 漢字テスト・漢字コンクール（10月～7月）

漢字学習を計画的に進めることを狙いとして、「漢字テスト」（20回）を行った。また、漢字学習をさらに活性化することを狙いとして「漢字コンクール」（4回）を実施した。

#### (10) その他

以上に加えて、独話練習、討論会（ディベート）、ことばのクラス（ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム）なども行った。さらに、本学の学部生向けに開講されている教養科目の1つである「留学生と日本：異文化を通した日本理解」にも参加した。

#### (11) アンケート

2010年7月に、学習者に対して、コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下、「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問のみについて、アンケート結果を紹介する（回答者8名）。

---

満足度	満足していない	満足している	
-----	---------	--------	--

---

評価	0	1	2	3
----	---	---	---	---

---

回答者数	0人	0人	1人	7人
------	----	----	----	----

---

**(12) 今期の試みと今後の課題**

今期は、まず、学習者の日本語力と興味のある所在をあらためて考慮し、各種「読解教材」の見直しと差し替えを行った。それに伴い、「筆記テスト」の修正も行った。

また、ここ数年、「総合演習」のテーマの1つとして、地域の産業・文化について取り上げている。今年度は、上記の通り「なごやとやきもの:リトルプレス、ジンを通して東海地方の特産物を知ろう」と題して、日本文化・日本事情についての多角的な学習、日本語

を用いる多様な活動を行った。また、今年度の新たな試みとして、「リトルプレス／ジンの作成」を課題としたが、学習者は大変熱心に取り組み、リトルプレス／ジンの出来栄も期待以上であった。この種の「総合演習」が、上級学習者に有効であることの一面があらためてわかった。来年度以降も、テーマ、方法などを工夫して継続していきたい。

さらに、使用した教科書（上記参照）について修正すべき点が明確になった。来年度以降、修正し、改訂版を発行したい。